



それでも  
野球を  
続けたい

5

山に囲まれた木曾青峰のグラウンドで、野球部員たちは、名古屋市のパーソナルトレーナー谷口祐平(26)から、体力トレーニングの指導を受けていた。「きつい」「無理」と悲鳴をあげ、地面に両手をついた。

谷口は、監督の柳瀬元(27)の大学時代の後輩。柳瀬が「この地域では会う人が限られる。いくつものやり方に触れて、成長してほしい」と、月1回ほどのペースで、谷口に指導に来てもらっている。

昨秋の地区予選。木曾青峰は部員不足のため、同じく部員が足りなかった蘇南と連合チームを組んで出場した。両校のある木曾郡内の全8中学校に野球部はない。木曾の中学生はクラブチームで週末に練習している。力のある中学生は、人数が多い、レベルの高い環境を求めて、都市部の強豪校へ進学し、地元に残らない傾向がある。

野球をどう指導したらいいのか――。2013年に監督に就いた柳瀬は、郡内の小中学生の指導者が悩む姿を目の当たりにし、体育教師とし

## 木曾青峰 環境を整備 ■ 蘇南 地道に3年

# 単独出場 この夏花開く

てできることを模索した。

「高校生のパフォーマンスを上げるためには地域と連携して、小中学生の段階から取り組む必要がある」との思いがあった。谷口らトレーナーを郡内の小中学生のチームに紹介。木曾青峰で実践している練習メニューのマニュアルも作成して、指導者に配るなどした。

まいた種は芽生え始めている。今春、入部した1年生5人は郡内の中学野球チームの出身者だ。男子部員は12人になり、今夏の長野大会に単独

出場する。

1年生の1人、古畑伊織は、チームのコーチや、学童野球の監督を務める叔父から「木曾青峰に良い先生が来た」と聞き、学校見学の末、私立の強豪校ではなく、木曾青峰を選んだ。

入学から3カ月。「人数が少ない分、打撃練習の回数が多く、打撃の調子がいい。監督に筋肉の使い方や食生活の指導もしてもらって『体つきが変わった』と言われるようになった」と手応えを感じている。

6月28日の練習後、伊織

は、柳瀬からグラブを受け取った。柳瀬が松本県ヶ丘で球児だった頃に使用していたものだ。伊織のグラブの傷みが激しくなったからだ。伊織は「軽い気持ちで渡してくれた訳じゃないと思う。期待に応えたい」と意気込む。

古畑太陽(1年)は、柳瀬の指導を受けた卒業生の兄から「木曾青峰は一番野球を楽しめるところ」と聞いて、入学した。「人数が少ないので、練習の準備でも一人ひとりが素早く動く。良いプレー

をする」と味方が盛り上がり、雰囲気がいい」という。「木曾青峰に入れてよかった」

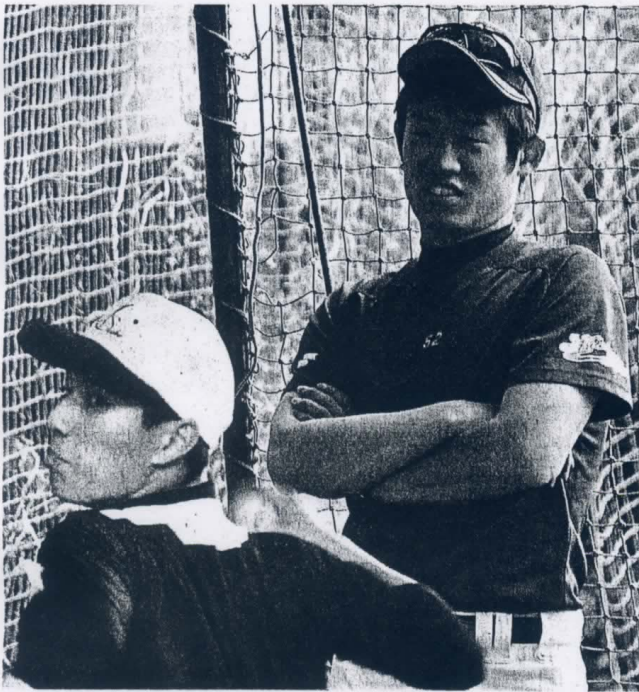
昨秋、木曾青峰と連合を組んだ蘇南も、1年生選手5人が入部。今夏の長野大会に選手9人で単独出場する。5日のグラウンドで、部員たちは2チームに分かれ、実戦練習。監督の大野田尚規(24)が投手役になり、プレーのたびにマウンド上から指導している。

大野田が不在の時は、主将須ヶヶ丘との試合で初回に先取点を挙げた。生選した松尾はうれしさのあまり、本塁に滑り込み、ベースを左手でたたいた。試合には負けたが、練習の成果を感じられた。

「1回逃げた野球を、一から始めて3年間できて自信になった。岡田には感謝している」

岡田も松尾に感謝する。「みんなが辞めていく中で、最後まで、あいつが残ってくれた」(敬称略)

それぞれの思いを胸に、球児たちは夏の長野大会に臨む。(この連載は大野扶生が担当しました)



投球練習をする古畑伊織(左)を指導する木曾青峰監督の柳瀬元＝木曾町福島



守備練習をする蘇南3年の岡田昂也(左)と松尾大志＝南木曾町読書